

JICA 青年海外協力隊での活動を通して

6月15日(木)

2年生国際理解講演会



2010年1月から2年間、マダガスカルで保健師としてボランティア経験をした鈴木祐子さんの講演を聴きました。

マダガスカルは、アフリカ大陸の東に位置する島国で、日本の約1.5倍の面積があります。公用語はマダガスカル語とフランス語で、フランス語は大学を出ただけが話せるのであって、基本的には日常生活はマダガスカル語とのこと。

鈴木さんは、主に2つの活動を実施しました。1つは子供の栄養改善に関する活動です。マダガスカルでは0～5歳児の約4分の1が栄養失調でした。理由は、現地の人たちの食事は米が中心で、そこにわずかなばかりの葉野菜や芋が入る程度だったためです。そこで、赤・黄・緑のカードを使いゲーム感覚で、栄養面でバランスのよい食事がとれるようにしたとのことでした。

2つ目は、手洗い啓発活動で、先輩が作成した「手洗いソング」にダンスを付けて広めました。それはいつ、どのように手洗いをしたらよいかを歌と踊りで紹介するものです。この歌を学校に広める活動に対して現地の教育委員会が大変協力的だったようです。この企画によりたくさんの子供たちの手洗い習慣に対する意識が高まりました。一方で、実際は学校に水道がない、石鹸が買えないなど、さまざまな問題があったのも事実でした。

これらの活動は、鈴木さんが前面に出て行ったのではないようです。「自分が何かをしてあげる」というのではなく「まずは現地の人々と良好な人間関係を築いてから、一緒に何かをしていこう」という姿勢で臨んだということです。自分は裏方にまわり、メインは現地のリーダーに任せておかないと、自分がマダガスカルを離れるとそこで終わりになってしまう。つまり、後継者づくりが大切とのことでした。

マダガスカルの生活で衝撃を受けたのは、「洗濯物は地べた(地面)に干す」という習慣でした。最初はかなり抵抗があったようですが、現地の人々はこのほうが速く乾く、と言っていたようです。このようにマダガスカルは日本とはかなり異なる文化をもった国ですが、鈴木さんは「途上国=貧しい=かわいそう」ということでは決してない、と力説してお話を終えられました。

